The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世の往生要集絵の図様と構成 ： 冥界のイメージ論
Author(s)	Tantisuk, Namsai
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55716
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（TANTISUK　NAMSAI（タンティスック　ナムサイ））	
論文題名	近世の往生要集絵の図様と構成 --冥界のイメージ論--

論文内容の要旨

天台僧源信の著した『往生要集』（寛和元年）は、阿弥陀如来の極楽浄土に往生するための修行とその利益を説いた十大文からなる書物である。江戸時代に出版された絵入り本は漢字仮名交じり文で、「序文」「大文第一厭離穢土」「大文第二欣求浄土」から構成される。その挿絵は、寛文三年刊本系、元禄二年刊本系、天保十四年刊本系、嘉永再刻本系の４系統に分類できる。

『往生要集』絵入刊本の挿絵との近似性がみられる絵画作品も存在しており、本研究ではそれらを「往生要集絵」と総称する。本研究では、大覚寺本《往生要集絵》（江戸時代中期、以下「大覚寺本」）、正楽寺本《地獄極楽図》（江戸時代後期、以下「正楽寺本」）、誓教寺本《三界六道図絵》（江戸時代後期から明治時代初期、以下「誓教寺本」）、浄国寺本《地獄図》（江戸時代後期から明治時代初期、以下「浄国寺本」）の４本を例として取り上げる。これらは江戸時代仏画における『往生要集』絵入刊本の受容とその変化を考えるのに不可欠な作品群である。本研究の目的は、往生要集絵に『往生要集』からの変化、特に六道観の変化がみられるのかを明らかにすることにある。また、その変化は隣接するジャンルの近世六道絵にも確認できるのか、表現的に共通する傾向などをもつのかを検討することで、両種の冥界のイメージにおける六道観を明確にすることができるであろう。

そこで、本研究の課題を四つに分けることとし、各一章を当てて考察した。第１章では、『往生要集』受容史の中で絵入刊本の位置と、その挿絵の様相を明らかにするため、六道観を表した中世六道絵の図様と比較し、図様の出入りと絵入刊本の独創性を分析する。第２章では、往生要集絵の各本を紹介し、絵入刊本との近似性を分析することで、往生要集絵の要素と構成、そして、絵入刊本との類似性を確認する。第３章では、往生要集絵と近世六道絵の図様を分析することで、往生要集絵に『往生要集』からの変化があるのか、また同時代の六道絵と共通した図様の選択がみられるのかを明らかにする。最後に、第４章では、往生要集絵と近世六道絵の構成を分析し、六道各部分の図像的扱い方の傾向、『往生要集』に説かれている六道観から変化した構成の有無を探る。さらに、冥界のイメージの形成には各細部についての検討も必要である。そこで、補論として二つの問題を扱った。補論１は冥界のイメージにおける業秤の多様性を論じたものであり、補論２は行基寺本《往生要集図画》の図様とその施主を主たる問題として取り上げた。

まず、第１章に関しては、絵入刊本のいずれの系統にも『往生要集』に説かれるそれぞれの八大地獄、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、仙人界、天道、六道の厭相、咸陽宮、隠士伎術、天竺の大婆羅門、聖衆来迎楽、蓮華初開楽、身相神通楽、五明境界楽、快楽無退楽、引接結縁楽、聖衆倶会楽、見仏聞法楽、随心供仏楽、増進仏道楽の図像が提示されていることをみる。そのうち、咸陽宮、隠士伎術、地獄のある別処、十つの浄土楽果を表す図様は中世六道絵に確認できないものであった。六道の情景を描き出す場合、先行した作品の図様も転用することは絵入刊本にもみられるが、詳細にみると違う表現も使用されている。例えば、同じ黒縄地獄ではあるが、聖衆来迎寺本など、中世六道絵の罪人は板台に伏せて責められる表現が多いが、寛文三年刊本系や元禄二年刊本系には木柱や石台におかれる。修羅道は、中世六道絵では、帝釈天軍と阿修羅軍の戦いの図様がよく用いられたが、絵入刊本はいずれの場合も死者同士の戦いで表されている。このように、絵入刊本の挿絵には中世作品にみられない図様をもって、六道と浄土の有様が描き出されていることもあり、そこに独創性がみられる。

第２章は４本の往生要集絵を扱って、絵入刊本諸系との近似性を検討した。その結果、大覚寺本と正楽寺本は元禄二年刊本系、誓教寺本は天保十四年刊本と嘉永再刻本、浄国寺本は天保十四年刊本の図様と類似していることが明らかになった。また、それらの様相をまとめてみると、絵入刊本の図様

が多く確認できること、六道と浄土楽果の図像から制作されたこと、六道と浄土あるいは悪趣と善趣・浄土の対比的な表現がみられることが明らかになった。また、冥界のイメージを制作するに当たって、絵入刊本が一種の図像典拠という役割を果たしたことも考えられる。

第３章では、往生要集絵と近世六道絵の図様を分析比較することを試みた。その結果、往生要集絵には絵入刊本の六道の図様が多く確認できたが、正楽寺本や誓教寺本などには女性地獄、三途川、奪衣婆など、絵入刊本にない図様が使用されていることが分かった。それに対し、六道絵は、往生要集絵と違って、閻魔王のみでなく、十王の裁判を描いたものもみられる。また、同じ場面を表すのに、別の図様あるいは別の表現で見せる場合もある。例えば、畜生道の図様は、往生要集絵の場合、絵入刊本と同様に強弱肉食図様で描写されているが、六道絵の場合、室町時代後期から流行った人面獣体の図様が使用されており、畜生道へ輪廻した主体である人間の苦しみが表されている。

人道の方は絵入刊本と同じく、往生要集絵には在世時の苦患があまり表現されていない。六道絵は中世作品と違って、人道の無常と死苦の図様だけで描出されているものが多い。また、天道は、誓教寺本を除いて、往生要集絵には五衰図様がみられない。六道絵の方も『往生要集』に説かれているような天道の図様は確認できない。このような分析から、往生要集絵の図様は主に絵入刊本の図様が使用されているが、六道絵と同様に当時流行していた図様も取り入れられ、江戸時代に広く受容された冥界観に応じて図様が選択・受容されていったことがうかがえる。また、人道と天道の図様は六道絵と共通して、『往生要集』に説かれている苦しみは簡略化・省略して描かれ、両道の図像的な扱われ方に変化がみられるようになった。

第４章では、往生要集絵と六道絵の構成を分析した。その結果をまとめると、往生要集絵には、六道と浄土、あるいは悪趣と善趣・浄土の対比的な構成が確認できる。六道の部分をみると、それらの世界は主に閻魔王庁の部分の近くに描写され、悪趣の空間が広がり、そのうち、地獄道の部分が最も大きい。地獄道への偏重は往生要集絵にも六道絵にもみられる。人道で区切られる大覚寺本、人道が第１‐２幅におかれる誓教寺本の構成、さらに死と関わる図様も合わせて考えると、人道は部分と部分の間、または作品のはじまりとされ、冥界に至る前の段階に配置されていることになる。また、人・天道の縮小・省略が著しくなったことも分かる。特に、六道絵における天道の苦患を描いた部分は確認できなくなった。それでも、往生要集絵と比較することで、天道は六道絵の要素として取り上げられないが、六道の一部という位置におかれているという捉え方は変わらないことが分かった。一方、六道絵を確認すると、多くの場合、閻魔・十王庁部分が上部におかれており、三途川などの冥界への入口と六道の空間がその下に広がってゆく。なお、冥界に至る前の段階としての人道は13世紀からうかがえ、その傾向は江戸時代になると顕著になる。天道は14世紀から空間の縮小、16世紀から遊楽を中心にして表される図様がみられ、江戸時代に入るとその空間が省略されていった。

本研究では、往生要集絵の図様と構成を分析することで、偏重される地獄道、冥界に至る前の段階として位置付けられるようになった人道、縮小・省略された天道という各道の特徴が見えてきた。中でも、人・天道の図像的な扱い方において『往生要集』の内容からの変化がみられる。いずれの変化も江戸時代に入ってから目立つようになった。江戸時代に流布した冥界・地獄巡り譚の仏教説話、縁起物語などの媒体は、人々が地獄道のイメージに親しむようになる基盤の一つであると思われる。また、現世肯定の見方が著しくなり、現世とそこに住む人間に主眼がおかれるようになり、六道輪廻の中心点としての人道が固定化していったと考えらえる。それに加え、道俗の書物にみられる人・天道の善趣という捉え方も合わせてみると、人道における善い面が肯定される中で、その上に位置付けられる天道はより善処とみられていったのであろう。また、天道については救われる死者の行き先という捉え方も数多くの説話に確認でき、厭離すべき天道というよりも、善趣としての天道の方が親しみを持たれたと推測される。こうした背景があって、以上のような人・天道の図像的な変化が受容されたとみられる。

第１章では、中世六道絵と絵入刊本の共通点・相違点を検討したが、両種の作品に用いられた業秤の図様は経典の内容に従わない場合があり、そこに付与される意味に多様性がみられる。また、第３章に述べる通り、近世に入ると、業秤は往生要集絵にも六道絵にも描かれており、冥界における裁判場面において流行した図様の一つともいえる。そのため、補論１では日本の冥界のイメージにみられる業秤の図様の多様性について考えてみた。特に、中近世転換期の作品である出光美術館本《六道絵》と長岳寺本《六道十王図》を中心に取り上げることとした。十王経類に説かれる業秤は、五官王庁に

属する裁判道具である。しかし、日本の冥界のイメージでは、中世からその所在は五官王庁、閻魔王庁、平等王庁、地獄道などとされてきた。出光美術館本の業秤をみると、閻魔王と地獄道の中間におかれている秤①と、平等王庁に配されている秤②、二つの業秤が描写されている。旧所蔵先の天野社と山岳信仰の関わり、山岳修行である「業秤」修行次第と地獄道との結び付き、秤①の様相から考えると、秤①は裁判道具よりも、責め苦道具という性格の方が表されている。一方、秤②の配置、図様の要素、関連する仏教説話からみると、それは冥界王庁で用いられる機能をもつ業秤とみられることになる。長岳寺本の業秤は、王庁場面と地獄道場面の間におかれているが、「業秤」修行の次第と違った図様の要素から、冥界における裁判の道具という面がより強く表されていると考えられる。

最後に、補論２では、絵入刊本「大文第一厭離穢土」の図様との近似性をもつ光明寺本系の行基寺本を取り上げて、その図様と施主に関して考察した。図様を分析することで、行基寺本の図様は寛文三年刊本系のものに似ているが、江戸時代に流行した図様も盛り込まれていることが分かった。また、その構成は往生要集絵よりも、六道絵の方に類似していた。このように、冥界のイメージを制作するに当たって、絵入刊本がもつ図像の典拠という役割は行基寺本からもうかがえるのである。そして、箱書きと名古屋町人関連資料をもって、行基寺本の施主は町人の第５代伊藤仁兵衛安信と母の方誉貞咸（方誉貞感）であることが分かった。ここからは、絵入刊本の図様は町人層まで受容されていたことが明らかに示されるのである。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ TANTISUK NAMSAI ）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　准教授	柴田 芳成
	副 査　教授	加藤 均
	副 査　准教授	五之治 昌比呂
	副 査　教授	水田 明男
	副 査　准教授	岩井 茂樹

論文審査の結果の要旨

提出された論文「近世の往生要集絵の図様と構成―冥界のイメージ論―」は、源信『往生要集』に説かれる地獄・極楽の世界を描いた絵画作品を対象として、中世から近世の作例を中心に、それぞれの時代・作品に描き出された図像を分析し、そこに現れた変化・不変の様相の中に当時の人々の六道観を見いだそうとするものである。従来、「六道絵」「地獄絵」などの名称で明確な区分なしに扱われていた地獄を描いた絵画に対して、稿者は典拠という観点から近世に出版された『往生要集』に基づく絵画を「往生要集絵」と分立し、整理を試みる。その区分を設けた上で図像分析を行ったことによって、混沌とした観のあった地獄にまつわる絵画にそれぞれの枠組みが与えられ、描かれた事象の中には時代的な変化のあることが明確に示された。以下、各章に検討された問題とそこから導かれることがらについて述べる。

第１章では、本論の基準となる近世刊行絵入り『往生要集』（以下、絵入刊本）について検討する。先行研究を参照しつつ、十一種知られる絵入刊本の諸本を、その挿絵によって四系統に分類し、中世六道絵の図像と比較する。そこから、例えば、修羅道の場面において、中世六道絵では帝釈天軍と阿修羅軍の戦いで表されていたものが、絵入刊本では亡者同士の戦いで描かれることなど、絵入刊本には中世作品に見られなかった表現が採用されていることを指摘する。

第２章は、稿者の調査した四本の往生要集絵（大覚寺本、正楽寺本、誓教寺本、浄国寺本）の特徴について考察する。挿絵の検討から四本それぞれの典拠となった絵入刊本を推定するとともに、絵画表現としていずれも六道（悪趣）と浄土（善趣）とが対比的に捉えられていることを述べる。

第３章では、第２章に取り上げた四本の往生要集絵と近世六道絵を比較する。往生要集絵には、本来の『往生要集』にはない、女性の地獄・三途川・奪衣婆などが描かれるが、それらは近世六道絵とも共通する要素であり、人道、天道の描写においては両者とも『往生要集』に説かれる苦しみが簡略化、あるいは省略されていることを確認し、往生要集絵が近世に流布した冥界観を取り入れて変容していることを明らかにする。一方で、畜生道、人道には相違点（順に、往生要集絵：弱肉強食図、在世時の苦患図なし、近世六道絵：人面獣体図、無常・死苦の図）が見られることを示し、近似する表現をもつとはいえ、両者が合一することはなく、それぞれの作品は本来の性格を残していることにも留意する。

第４章は、近世六道絵の例を参照しつつ、往生要集絵における六道それぞれの配置と構成を分析する。全体として六道（悪趣）と浄土の対比という構成をもちながら、描写としては地獄道の場面が大きな位置を占め、人道・天道が縮小される傾向をもつこと、六道の一部であるはずの人道が冥界の入り口にあたる場所に配置されることなどを指摘する。こうした変化の背景には、現世肯定的な近世の思潮の中で六道輪廻の中心点としての人道という考えが定まり、しかも種々の文学・思想作品の中に人道・天道が善趣と語られる言説もあることから、両道が厭離すべき世界というよりも、親しむべき世界、あるいは救われる死者の行き先と考えられるようになったことがあるのではないかと推察する。

以上の４章が往生要集絵の構成に関する、本編にあたる考察であるが、このあとに、冥界イメージを形成する細部の問題として、業秤の図様の担う意味を問うた補論１、往生要集絵（行基寺本）の制作環境に関わって、施主の問題を扱う補論２が付される。

補論１に扱う業秤は、往生要集絵、中世・近世六道絵のいずれにも必ず描き込まれるが、罪の軽重を測

るという経典の内容とは一致しない場合があるという。そこで業秤のもつ意味の多様性を測る事例として、出光美術館本六道絵、長岳寺本六道十王図を取り上げる。出光美術館本の場合、一図中に二つの業秤があり、一方は裁判道具と認められるものの、もう一方はむしろ地獄の責め具とみなされ、その様相に山岳修行の修行次第が反映しているのではないかと推察する。補論２は、行基寺本の箱書きを手がかりに近世名古屋町人資料を探り、同本の施主が当時の豪商伊藤仁兵衛安信とその母方誉貞咸であることをつきとめ、絵入刊本に基づく往生要集の図柄が町人層にまで受容されていた実例を示した。

以上の通り、本研究は美術史的関心にとどまらず、思想や文学、作品を生み出した社会のあり方にまで目を向けたものであり、作品分析にあたっては実地に寺院での調査もこなすなど、文化史研究として位置づけられるものである。本論文に取り上げられた近世の様々な冥界絵画については、従来、美術史学的な評価は必ずしも高かったとは言えず、そのために研究の蓄積は少ない分野であった。むしろ近世文学研究者や妖怪文化研究者らがそれぞれの関心にしたがって、その一部を取り上げて論じることが多かったといえる。そういった中、ここに稿者が細部への関心も合わせもって、全体像、さらにはその展開の様相を把握しようとしたことは高く評価されるべきであろう。往生要集絵として検討されたのは四例にすぎないが、今後さらに稿者によって分析の深化が見込まれるものであり、近世の冥界絵画考察に関する先駆的研究として、その学術的な価値は大きい。

以上により、論文審査委員会は本論文が博士の学位に値するものと判断した。